

尊敬する二十歳年上の彫刻家に、
七日間「自分で慰めること」を
禁じられました

—全裸で拘束され、弟子ではなく一人の
女として求められるまで—

【登場人物】

【小暮 真帆(こぐれ まほ)・29 歳】

人間の肉体を題材に制作する女性彫刻家。槇野の弟子。
真面目で自制心が強く、彫刻に対して妥協しない。槇野
を彫刻家として心から尊敬すると同時に、ひそかに一人
の男としても惹かれている。

【槇野 朔一(まきの さくいち)・49 歳】

卓越した実力を持つ彫刻家。真帆と環の師匠。
寡黙で厳格。人間の肉体を表面的な形ではなく、その内
側でせめぎ合う力や欲望まで含めて捉えている。

【高瀬 環(たかせ たまき)・36 歳】

槇野の一番弟子。真帆の成長につながるのならという
意思から、槇野の依頼を引き受ける。

第 1 話

生きていない肉体

「生きていないな」

槇野先生は、私が半年をかけて作った女の像を一周し、最初にそう言った。

高い窓から射し込む午後の光が、粘土の表面を斜めに照らしている。肩から腿の付け根までをかたどった、ほぼ二分の一の大きさの女性像。何度も削り、盛り、指先でならしてきた肌には、私なりに拮んだ骨格も筋肉もある。

それでも、先生の目には何も隠せなかった。

「骨格の捉え方も、量塊の組み立ても破綻してい

ない。表面の処理も、前より格段にいい。技術だけを見れば、もう習作の域は出ている。作品として人前に出しても恥ずかしくない」

先生は像に触れず、その周囲をもう一度ゆっくり歩いた。

黒に近い墨色の仕事着は、作務衣を思わせる打ち合わせの上衣と、同じ木綿で仕立てられたゆったりした作業用ズボンだった。洗い込まれた布は柔らかく、上衣は脇の紐で留められている。

その袖から伸びた腕には、乾いた粘土の白い跡が残っている。短く整えた黒髪には、こめかみのあたりだけ銀色が混じっていた。目尻と眉間には、年齢相応の線が刻まれている。整った美貌というより、長い年月を一つの仕事へ捧げてきた人間の

顔だった。先生が像の前に立つと、アトリエの空気までそこへ集まるように感じられた。

「では、どこがいけないのでしょうか」

声がわずかに上ずった。

槇野朔一という彫刻家に、「習作の域は出ている」と認められる。それは、二年前の私には想像もできなかった評価だった。

二十一歳のとき、私は地方美術館で先生の作品を初めて見た。椅子に腰掛け、うつむいているだけの女のブロンズ像だった。顔の半分は髪に隠れ、手も膝の上で組まれている。派手な動きなど何ひとつないのに、その女が次の瞬間に息を吐き、指をほどくように思えた。

冷たい金属の中に、どうして体温を閉じ込められるのだろう。

その答えを知りたくて彫刻を続け、ようやく弟子として認めてもらった。先生が直接指導する人間は少ない。国内の大きな賞を取り、美術館にいくつもの作品が収蔵された今も、それは変わらなかった。

だから先生の言葉は、私にとってほかの誰の評価より重い。

「だが、この女には時間がない」

低い声に、意識を引き戻された。

先生は、女性像の胸から腹へ視線を下ろした。

「彫刻は止まっている。だが、生きている像まで止まっているわけではない。その姿になる直前に何があり、次の瞬間に何が起きるのか。優れた像には、見えない前後の時間が封じ込められている」

「この像には、それがないということですか」

「ない。この女は、なぜ胸を開き、なぜ腹を固くしている」

私は答えられなかった。

モデルが取った姿勢を正確に写した。胸の起伏も、腹部に落ちる陰影も、何度も見直した。けれど、その形が何によって生まれたのかを、考えたことがなかった。

「言いかけた言葉を呑み込んだのか。誰かの手を

待っているのか。それとも、触れられることを拒んでいるのか」

先生は作業台から小さな粘土片を取り、女性像の胸骨の下へごく薄く盛った。脇腹を指先でわずかに押し、腹部の面をほんの数ミリだけ変える。

輪郭はほとんど変わっていない。

それなのに、女が急に息を止めたように見えた。胸の内側に何かを抱え、口に出すまいと耐えている。その直前と、そのあとに続く時間までが、粘土の奥から浮かび上がった。

「……何かを、堪えています」

「変えた量はわずかだ。だが、形に理由を与えた」

先生の指が、加えた粘土を静かに取り去った。

女は再び、きれいなだけの像に戻った。

「お前は目に映った結果を作っている。だが、人間の肉体は、目に見えない衝動に内側から押されて形になる。欲しい、逃げたい、隠したい、さらけ出したい。相反する力が一つの体の中でぶつかった、その瞬間の形だ」

先生は私を見た。

「お前の女には、その衝突がない。だから、どれほど正しく作っても生きない」

理解できたからこそ、何も言えなかった。

先生の数回の指の動きだけで、私が半年かけて

も与えられなかった時間と感情が、像の中に生まれた。そして、先生の指先を目で追っている自分に気づき、私は像へ視線を戻した。

制作中の私は、肩に触れる暗い髪を低い位置で束ね、化粧もほとんどしていなかった。淡い灰青色のシャツとチャコールグレーの作業用ズボンも、汚れて構わない実用的なものだった。先生の前で、一人の女として見られることを意識した格好ではない。それなのに、先生の視線を意識せずにはいられなかった。

こんな感情を知られてはいけない。

先生を尊敬している。彫刻家として、心の底から。その思いに偽りはない。けれど、制作中に動く腕や、作品を見るときに細められる目や、考え込む

ときの沈黙まで意識してしまうのは、弟子としての尊敬だけではなかった。

二十歳も年上の師匠に、私は一人の男として惹かれている。

自覚したのがいつだったのかは分からない。認めたところで、どうするつもりもなかった。先生のそばにいられるのは弟子だからだ。その立場を、自分の浅い欲望で汚したくなかった。

先生が独身で、今は特定の相手もないことは知っていた。だからといって、二十歳年下の弟子が、その私生活へ踏み込んでいい理由にはならない。

先生に師事したいと申し出た人間は、私のほか

にも大勢いた。けれど、先生は肩書や受賞歴では弟子を選ばなかった。私も最初の一年は、作品の写真を送っても返事すらもらえなかった。それでも作り直して送り続け、七作目でようやく「持ってい」と短い連絡が届いた。

初めてこのアトリエを訪れた日、先生は私の像を十分も見ずに欠点を言い当てた。そして最後に、「まだ下手だが、見ることを諦めてはいない」と言った。

その一言だけで、何年でもついていけると思った。

だからこそ、先生が私を見る目に、弟子への期待とは別のものを求めてはいけなかった。

「小暮」

「はい」

「今、何を隠した」

胸の内を言い当てられた気がして、息が止まった。

けれど先生の視線は、私と女性像の間に置かれていた。

「お前は、自分が見たくないものを像の外へ追い出した。欲しがることも、拒むことも、恥じることも、耐えることも。だから形を押し動かす力が残っていない」

「消したつもりは……」

「意識して消したのでないなら、初めから見えていないんだ」

静かな言葉ほど深く刺さった。

形は作れても、人間が作れない。

この二年間、私は同じ場所を回り続けてきた。

技術は増えた。形も以前より正確になった。小さな公募展で入選することもあった。それなのに、新しい作品を作るたび、前の作品を少しきれいに作り直しているだけだという感覚が強くなった。

二年も先生のそばにしながら、私はまだ、あの日に見たブロンズ像の足元にも届いていない。

「どうすれば、見えるようになりますか」

先生は答えなかった。

壁際の古い時計が、一秒ずつ音を刻んでいる。
アトリエには、粘土と木と石膏の匂いが満ちていた。
いつもなら落ち着く匂いが、今日は息苦しい。

「お願いします」

もう一度、私は言った。

「私には、もう後がないんです」

口に出した途端、堰が切れた。

「二年間、ずっと同じところにいます。先生に教えていただいたことは増えているのに、作るものの本質は何も変わっていません。新しい像を作るたび、今度こそはと思うんです。でも、完成する前か

ら分かってしまう。これも生きていない。これも前と同じだって」

「小暮」

「それだけは嫌なんです」

先生の言葉を遮ったのは、初めてだった。

失礼だと分かっていた。それでも、今ここで引き下がれば、私はまた作品の表面だけを直し、前へ進んだふりをする。

「何度壊して、作り直しても駄目でした。何を壊せばいいのかさえ、もう分からないんです」

声が震えた。作業台の縁を掴んだ指に力が入り、爪の先が白くなる。それでも視線だけはそらさな

かった。

「もし、私の才能がここまでなら、そう言ってください。先生に言われるなら受け入れます。でも、まだ私に足りないものがあるのなら——それが何なのかも知らないまま、諦めたくありません」

先生は微動だにしなかった。

時計の秒針だけが進んだ。一つ、二つと音を数えているうちに、自分の呼吸ばかりが耳についた。窓の外を車が通り過ぎる音が遠ざかる。それでも先生は何も言わない。

私は恥ずかしさで逃げ出したくなった。二十九歳にもなって、認めてほしいと子どものように縋っている。けれど、言葉を取り消すことだけはで

きなかった。

「先生の作品に手が届くなんて思っていません。
でも、せめて、自分が作った人間を、一度でいい
から生かしたい。今の壁を越えられる可能性がある
なら、どんなことでもします。どれほど辛いこと
でも、逃げません。お願いします。私を、ここで終
わらせないでください」

最後の言葉は、ほとんど声にならなかった。

先生はなおも黙っていた。私の覚悟ではなく、そ
の奥にある弱さまで量っているような沈黙だった。

「“どんなことでも”などと、軽々しく言うな」

鋭い声に、私は息を呑んだ。

先生は怒鳴らなかった。けれど、その目には、それまでの批評とは違う厳しさがあった。

「その言葉を受け取る人間が、常に正しいとは限らない。相手を敬っているからといって、判断まで渡していい理由にはならない」

私の胸の内まで戒められたようだった。

先生になら何をされてもいい。ほんの一瞬、そう考えた自分が確かにいた。

「……すみません」

「謝ることではない。言い直せ」

私は唇を結び、考えた。

先生の望む答えを探すのではない。自分が何を

求めているのかを、自分の言葉にしなければなら
ない。

「何を求められても従う、という意味ではありません。
何をするかは、内容を知ったうえで自分で
決めます。ただ、私に足りないものがあるなら、そ
れがどれほど辛い答えでも、目をそらしません」

先生は何も言わなかった。

最初の沈黙より、さらに重かった。

先生は私から目をそらし、女性像の前へ戻った。
正面から見て、横へ回り、背面で足を止める。私
には見えない像の顔を、長いあいだ見つめていた。

秒針が一周した。

その間、私は一度も動けなかった。先生が「帰れ」と言えば、すべてが終わる。けれど同時に、先生が口にしようとしているものは、簡単に教えを乞うてよい種類のものではないのだと、沈黙の長さだけで分かった。

やがて先生が像の向こうから私を見た。その目が、それまでとは違う角度から私を測り始めた気がした。

「お前の壁を越えるために、私から示せるものはある」

鼓動が大きくなった。

「何ですか」

「ただし、通常の指導ではない」

先生は像の向こうから私の正面へ戻り、視線をそらさずに告げた。

「これからお前に話すことは、常識に照らせば狂っている。芸術のためなら何をしてでも許されると思うなら、大間違いだ。私は、芸術を言い訳に自分の行為を正当化するつもりはない」

その言葉に、期待しかけていた心が怯んだ。

「だが、お前の壁を越えるためには、その狂った世界を覗かなければならないのも事実だと、私は考えている」

「狂った世界……」

「人間が理性や体面を保てなくなったとき、肉体に何が起きるのか。欲望を隠せなくなった顔がど

う変わり、どこに力が入り、どこから力が抜けるのか。作られた姿勢でも、写真でもない。目の前で起きる変化を見る」

乾いた喉が、小さく鳴った。

「それを、どうやって……」

「高瀬に協力を頼む。彼女なら、この話の意味を理解したうえで、自分の意思で判断するだろう」

「高瀬さんが？」

槇野先生の一歩弟子、高瀬環さん。今は独立して作品を発表している、私より七歳年上の女性だった。

技術だけでなく、人体の奥にある感情まで造形

できる人だ。その環さんに、先生は何を頼もうとしているのだろう。

「高瀬が承諾すれば、全裸になってもらい、お前の目の前で椅子に拘束する」

言葉の一つ一つは理解できた。それでも、それらが一つの光景として結びつくまでに時間がかかった。

「全裸で……拘束するんですか」

「私が彼女の体に触れ、欲情を引き出す。理性も体面も保てなくなるところまで追い込む。最後に彼女が何を選ぶのかも含め、お前にはそのすべてをすぐそばで見ってもらう」

環さんが独身で、今は決まった相手もないこ

とは、以前本人から聞いていた。それでも、先生の前で肌をさらし、欲望まで引き出されることへ、すぐ結びつく話ではない。

裸のモデルなら珍しくない。私もこれまで何度も目の前にしてきた。

けれど、先生が言っているのは、形を見せるための裸体ではなかった。一人の女が欲望に吞まれ、普段は隠しているものをさらけ出していく。その過程を、先生自身の手で引き出すということだった。

触れる。欲情を引き出す。理性も体面も保てなくなるまで追い込む。

三つの言葉が、順番に頭の中で繰り返された。

なかでも、先生自身の手で環さんの欲望を引き出すという事実が、異様な重さを持っていた。

先生が環さんの裸を観察するだけではない。大きな手でその体に触れ、普段は誰にも見せない欲望を引きずり出す。最後に環さんが何を選ぶのか、先生は明かさなかった。

その光景を想像した瞬間、胸の奥を細い刃で切られたように痛んだ。それなのに、その痛みと同じ場所から、認めたくない熱が湧き上がった。

私は環さんを羨ましいと思った。

自分の中から浮かび上がった感情に、私はもっと怯えた。

「高瀬には、これから私が意思を確認する。彼女が

断れば、この話はそこで終わりだ。お前が望んでも、行わない」

「はい」

「彼女が承諾したとしても、お前には途中で出ていく権利がある。撮影も録音もしない。見たことを外で話すことも許さない」

「分かりました」

「まだ分かっていない」

先生の言葉が、私の返事を切った。

「お前は、私に失望するかもしれない。私が求めてきた彫刻の世界そのものを、嫌悪するかもしれない。見なければよかったと思っても、一度見たも

のを忘れることはできない。それくらいのことだ」

それでも見たい。

そう答えかけた私を、先生が手で制した。

「今、答えるな」

「でも、私は——」

「昂ぶったまま下した決断を、私は受け取らない」

低い声に、言葉を失った。

「一晩、自分で考えろ。私の評価も、お前が弟子で
いられるかどうか、この返事には関係しない。

断ったとしても、これまでどおり指導する」

逃げ道ではなかった。

私から先生への尊敬を取り除き、認められたい
という願いも取り除き、それでも残るものがある
かを問われている。

「明日の同じ時刻に来なさい」

古い時計が時を刻む音が、急に大きくなった。

「そのときも、心の底から扉を開けたいと望んで
いるなら——自分の言葉で、返事をしなさい」

第 2 話

見る者、見られる者

一晩考えても、答えは変わらなかった。

眠ろうと目を閉じるたび、槇野先生の言葉が戻ってきた。

高瀬さんを全裸にして、椅子に拘束する。

先生自身の手で欲情させ、理性も体面も保てなくなるまで追い込む。

最後に高瀬さんが何を選ぶのかも、すぐそばで見る。

考えれば考えるほど、常識から外れていると思った。彫刻を学ぶために必要なことだと、何の疑

いもなく言える内容ではない。先生自身も、芸術を言い訳に正当化するつもりはないと認めていた。

それなら、断るべきなのだろうか。

何度も自分に問いかけた。

けれど、想像の中でアトリエの扉を閉じるたび、胸の奥に耐えがたい後悔が残った。知らずに済んで安堵する自分より、扉の向こうに何があったのかを生涯考え続ける自分のほうが、はっきり見えた。

彫刻のためだけではなかった。

先生が高瀬さんに触れるところを見たい。見たくない。それ以上に、私もあの手に触れられたい。

今、私に恋人はいない。これまで男性と付き合ったことはあったが、経験は決して多くなかった。まして、これほどはつきりと、誰かの手を欲しいと思ったことは一度もない。

その感情を認めた瞬間、私はようやく、自分が何を選ぼうとしているのか分かった。

芸術のためだと、自分の欲望まで先生の責任にしてはいけない。

私は彫刻の先を見たい。そして、一人の女として、槇野先生が開くという扉の向こうを知りたい。

二つとも、私自身の望みだった。

翌日、約束の時刻より十分早くアトリエの前へ着いた。

古い倉庫を改装した建物の扉は閉まっていた。
取っ手に手をかければ、昨日までと同じ弟子として入れる。それなのに、扉一枚の向こうが、まるで別の場所になったように感じられた。

腕時計の針が約束の時刻を指すまで待った。

早く来た熱に任せて入るのではない。先生に命じられたからでもない。決めた時刻に、自分の意思で扉を開ける。

秒針が十二を越えた。

私は取っ手を押し下げた。

アトリエには槇野先生一人しかいなかった。

いつもの墨色の仕事着をまとい、私の女性像の

前に立っている。私が入っても、すぐには振り返らなかつた。

扉が閉まる音を待ってから、先生が言った。

「答えを聞こう」

挨拶も、体調を尋ねる言葉もなかつた。

私は一晩かけて選んだ言葉を、頭の中でもう一度確かめた。

「先生が見せようとしていることが、正しいのかどうかは、今の私には分かりません。見たあとで、先生や彫刻に失望する可能性があることも分かっています」

先生が振り返った。

「それでも、私は知りたいです。私の像にないものが、人の肉体にどう現れるのか。そして、それを知った自分が何を作るのか。誰かに命じられたからではなく、私がそれを望んでいます」

喉が震えそうになるのを、息を整えて抑えた。

「お願いします。先生が見せようとしているものを、最後まで自分の目で確かめさせてください」

先生は私の目を見たまま、短く息を吐いた。

「その答えなら、受け取る」

褒められたわけではない。許されたわけでもない。それでも、自分の言葉が先生へ届いたのだと分かった。

先生が奥の扉へ声をかけた。

「高瀬」

「はい」

扉が開き、高瀬環さんが姿を現した。

黒いワンピースを着て、顎のあたりで切りそろえた髪を片側だけ耳へかけている。華やかに人目を引くというより、落ち着いた眼差しと背筋の伸びた立ち姿に、三十六歳の女性らしい静かな艶があった。いつものように穏やかな表情だったが、制作を手伝う日のエプロンは着けていなかった。

環さんは私の前まで来ると、先生ではなく私を見た。

「昨日、先生から告げられた意味を考えただけで、それでも進むと決めたのね」

「はい」

「昨日より、何を選ぼうとしているのか分かっています。私自身が知りたいから、ここへ来ました」

環さんは少しのあいだ私を見つめ、それから小さくうなずいた。

「分かった。では、私の答えも伝えておくわ。私は先生から昨夜、改めて内容を聞いた。そのうえで、今日ここへ来ると自分で決めました」

環さんは一度、先生へ目を向け、また私を見た。

「あなたの成長のため、というのは否定しないわ。

今のあなたには、目の前で起きる肉体の変化を見る必要があると、私自身が判断したの。ただし、あなたのために我慢するのも、先生に命じられたからでもない。見られる側に立つことで、私自身にも確かめたいものがある。だから引き受けました」

「もう一つだけ。先生とこういうことをするのは、私も今日が初めてよ」

静かな声に迷いはなかった。

先生が私たち二人を見た。

「始めたあとでも、どちらかがやめると言えば、その時点で終わる。理由は求めない。撮影も録音もしない。ここで見聞きしたことは、三人の外へ出

さない」

「分かりました」

私と環さんの声が重なった。

先生は環さんへ視線を移した。

「高瀬、最後に確認する。昨日伝えた内容を、すべて受ける意思があるか」

「あります」

「途中で止めるときは、はっきり言え」

「ええ」

先生はそれ以上念を押さなかった。環さんの答えを疑わず、同時に、言葉にしていけないことまで都合よく解釈しない。その態度に、長い年月をか

けて築かれた二人の信頼が見えた。

胸の奥に、小さな痛みが走った。

私はまだ、その信頼の外側にいる。

「小暮。スケッチ帳を用意しろ」

「描くんですか」

「描けるならな」

先生はそう言って、アトリエの扉に内側から鍵をかけた。

金属音が、昨日より深く胸へ落ちた。

環さんが、モデル用スペースの中央へ歩いていった。

高い窓からの自然光を補うように、左右から可動式の照明が向けられている。その間には、低い背もたれと脚を支える台が付いた椅子が置かれていた。普段の裸体制作で使う椅子に似ている。違うのは、肘掛けと脚台に、幅の広い革の帯が取り付けられていることだった。

環さんは私たちに背を向け、背中へ手を回すと、黒いワンピースのファスナーをゆっくり下ろした。

金具の滑る音が、静かなアトリエに小さく響く。

裸体モデルは、何度も見てきた。衣服を脱ぐ場面に立ち会ったこともある。だから、目をそらす理由などないはずだった。

それでも、昨日から意味を持ってしまった先生

の視線を思うと、環さんの肌が現れていくたびに、自分まで見られているような緊張が走った。

環さんは肩から落としたワンピースを自分の手で畳み、作業台の端へ置いた。下着も一枚ずつ外し、同じように整えて重ねていく。

やがて環さんは、何も身につけずに私たちの前へ立った。

彫刻家の目で見れば、均整だけで測れる体ではなかった。細い首から肩へ流れる線はすっきりと美しく、豊かな胸には、若い裸体の張りとは異なる柔らかな重みがあった。くびれた腰から丸みのある臀部、しなやかな腿へと続く線には、成熟した女だけが持つ艶がある。照明を受けた肌はなめらかに光り、呼吸するたびに腹部がかすかに上下

していた。

だからこそ、目を離せなかった。

整えられた理想ではない。けれど、理想として磨かれた像よりも鮮やかに、一人の女が生きてきた時間と、今ここに立つ美しさを宿した体だった。

環さんが椅子へ腰を下ろす。

先生が環さんの前へ立った。

「始める」

「お願いします」

環さんが自分から両腕を肘掛けへ載せた。

先生は左手首、右手首の順に革帯を締めた。指が二本入る余裕を確かめ、金具がすぐ外れること

を環さんにも見せる。続いて両膝を曲げ、左右の脚台へ足を載せさせ、足首にも革帯を回した。

両脚が大きく開かれる。

先生はさらに、幅の広い柔らかな組紐を環さんの右膝の少し上へ回した。膝の関節にはかからない位置だった。組紐は椅子の右外側から背面へ回され、反対側から左膝の少し上へ渡される。両膝を左右へ開いた角度で長さを決め、背面の留め具へ固定したあと、ひと引きで解けることを環さんに確かめさせた。

一本の組紐が椅子の背を抱くように両腿を外側へ支え、環さんは自分の意思では膝を閉じられない姿になった。

「痛むところは」

「ありません」

「手は動くか」

環さんが指を握り、開いてみせた。

「大丈夫です」

最後の金具から先生の手が離れたとき、環さんの呼吸がわずかに深くなった。

両膝は高く持ち上げられたまま左右へ開き、足首は低い脚台に留められている。正面から見れば、脚のはっきりとM字を描いていた。肘掛けに両腕を預けた胸は隠しようがなく、緊張で硬さを帯び始めた乳首まで照明の下にさらされている。開い

た腿の間にも遮るものではなく、股間まですべて、私と先生の目の前に露わだった。まだ肌には触れていない。それなのに、いちばん隠したい場所には、すでにかすかな潤みが光っていた。

裸体モデルは見慣れている。けれど、隠したいと思っても手で覆えず、脚さえ閉じられない裸体は、同じ裸ではなかった。

「小暮」

「はい」

「今、何が変わった」

私は開いたスケッチ帳へ目を落としかけ、すぐ環さんへ戻した。

「肩に力が入りました。腹部も、その……さっきより固くなっています」

「それは結果だ。力がどこへ向かっている」

昨日、私の像に欠けていると言われたもの。

環さんの全身を見た。

手首は帯から逃れようとしていない。それでも肩はわずかに内側へ入り、胸を守ろうとしている。一方で、閉じられない脚は大きく開かれ、腰は椅子の奥へ沈みながらも、先生のいる前方へ意識を向けている。

「閉じたい力と……待っている力です」

口にした途端、環さんの頬がわずかに赤くなっ

た。

「続けろ」

「隠したいのに、見られることを待っている。逃げたいわけではない。でも、さらけ出している自分を、まだ受け入れきれていない」

先生が初めて、小さくうなずいた。

「それが、形を内側から押している力だ」

まだ、先生は環さんの肌に一度も触れていない。

それなのに、昨日の私の像にはなかったものが、目の前の体には満ちていた。

先生が環さんの右側へ回った。

顔を首筋へ近づける。

触れる寸前で止まり、ゆっくり息を吐いた。

環さんの肩が震えた。首筋の肌が細かく粟立ち、胸の先がわずかに硬さを増した。

私は慌てて鉛筆を動かした。肩から胸へ線を引こうとしたが、紙の上に生まれた線は途中で折れた。

——まだ、触れてさえいないのに。

言葉にはできなかった。けれど先生は、紙の上で途切れた線を一瞥した。

「体は、触れられてから反応するとは限らない」

先生は環さんの耳元へさらに顔を寄せた。

「次に何をされるか予測した時点で、肉体は先に

備える。拒むときも、欲するときも同じだ」

環さんが目を閉じた。

「高瀬。目を開けろ」

すぐに瞼が上がった。

「自分が見られていることから逃げるな」

「……はい」

環さんの声は、さっきより少しかすれていた。

先生は今度は正面へ回り、胸の近くまで顔を寄せた。温かな息が肌を撫でるたび、環さんの乳首がさらに硬くなっていく。

その変化を、私は見逃すことができなかった。

見るべきだと思う気持ちと、見てはいけないと思う気持ちが、私の中でもぶつかっている。

「小暮。手を止めるな」

鉛筆が止まっていた。

「すみません」

「謝る前に見ろ。線を引くのは、そのあとだ」

私はスケッチ帳から手を離し、膝の上へ置いた。

先生の右手が上がった。

人差し指と中指がぴたりと揃えられ、その二本の指先が、環さんの鎖骨のくぼみへ触れる。

環さんの喉から、短い息が漏れた。

揃えられた二本の指は鎖骨に沿ってゆっくり横へ進み、肩を回り、胸の外側へ下りていった。肉を掴むのではなく、そこにある線を確認するような触れ方だった。

先生の指が動いたあとを追うように、環さんの皮膚が赤みを帯びる。

「小暮、目を逸らすな。触れている場所だけを見るな」

低い声に促され、私は環さんの全身へ視野を広げた。

先生はそれきり黙った。

二本の指が触れているのは胸の外側だけだった。けれど、環さんの口元には力が入り、腹部が

小さく震えている。開かれた腿にも、目に見えるほど筋肉が浮いていた。

反応は、触れられた一か所にとどまらない。抑え込もうとするほど全身へ逃げ、別の場所から形になって現れる。

先生の指が、胸の丸みに沿って内側へ進んだ。

硬くなった乳首の周囲を一度だけ回る。

環さんが唇を噛んだ。

先生はすぐには中心へ触れなかった。周囲を何度もゆっくりなぞり、そのたびに環さんの呼吸だけを深くしていく。

先生の指が止まり、環さんの目を見た。

環さんはその視線を受け止めた。

「続けてください」

環さんの方から、はっきりと言った。

その言葉を聞いてから、先生の指先が乳首を軽く押した。

環さんの腰が椅子から浮きかけ、革帯が小さく鳴った。

先生は反対側の胸にも手を添え、左右で異なる間を置きながら触れ続けた。片方へ意識が集まれば、今度は反対側へ指先を移す。次を待ちきれず環さんの体が追いかけてようとするたび、先生はわずかに手を退いた。

環さんの声が、少しずつ隠しきれなくなっていた。

「……っ、あ……」

先生は答えず、左右の胸を交互に指先と唇で刺激した。強さに任せることなく、触れる時間と離れる時間を変え、環さんが次を予測するたび、その予測を静かに外していく。

私はその顔を見ながら、自分の呼吸まで同じ速さになっていることに気づいた。

胸が熱い。脚を閉じて座っているのに、腿の内側が落ち着かない。下腹部に集まった熱はごまかしようがなく、下着の内側には、すでに自分の反応がはっきりと残っていた。

先生が環さんの胸へ顔を近づけた。

舌先が、指で触れていたのと同じ線をゆっくりたどる。

環さんが大きく息を吸い、背中を反らした。逃げ場のない胸が前へ押し出され、舌先が硬い頂へ届く。

「あ……」

初めて、はっきりとした声が漏れた。

先生はその声に急かされることなく、舌先で形を確かめるように触れ続けた。やがて反対側へ唇を移し、空いたほうには揃えた二本の指を重ねる。環さんの体だけが、もっと先を求めて何度も動くとする。

欲しいのに、自分からは近づけない。

その矛盾が、胸から腹、開かれた脚の先まで、一つの流れになっていた。

昨日、先生が私の像に加えた数ミリの粘土を思い出した。

形を生んでいるのは、目に見える手ではない。もっと欲しいという、環さんの内側の力だった。

視線を下げると、開かれた腿の間に浮かぶ光は、拘束された直後よりも明らかに濃くなっていた。先生は、そこへまだ一度も触れていない。胸への刺激と、この先を待たされる時間だけで、環さんの体は隠しきれないほど先へ進んでいた。

先生の舌は硬くなった乳首をゆっくり舐め続け

ている。そのまま、胸に添えていた右手だけが離れ、腹部へ下りていった。

環さんが名残を追うように胸を上下させる。

指はへその周囲をゆっくり回り、腰骨の内側を通って、開かれた腿へ進んだ。すぐに中心へは向かわない。内腿を下から上へなぞり、あと少しという場所で止まる。

環さんの脚が閉じようと震え、革帯に阻まれた。

「……っ、……あ……」

環さんの喉からこぼれるのは、もう言葉にならなかった。先生は何も答えず、届きそうで届かない場所をゆっくり往復する。そのたび、環さんの腰が追いかけて、組紐に阻まれて戻された。

待たされている時間が私のためでもあると分かっている。それでも私は、次に先生の指がどこへ触れるのか、目を離せなかった。

先生の手が再び動いた。

内腿をたどった指先が、濡れた中心へようやく触れた。最初は、そこに現れた反応を確かめるように、開かれた輪郭をゆっくりとなぞっていく。やがて指先は、もっとも敏感な一点へ移り、ごく小さな動きを繰り返し始めた。

環さんの全身が大きく震えた。

声を抑えようと閉じられた唇が開き、喉の奥から甘い息が漏れる。先生は初め、そこに現れた反応を確かめるほどゆっくり指を動かした。環さん

がその動きを追える間は、決して急がない。

「……あっ……先生……」

やがて動きに一定の間隔が生まれた。環さんの腹部が波打ち、革帯の下で手首が反応する。呼吸がその間隔に揃ったところで、先生は少しだけ速さを上げた。

私はもう視線をそらさなかった。環さんの体も、そこへ触れる先生の指も、正面から見た。

触れ方が速まるにつれ、環さんの声は高くなり、腰が細かく揺れた。先生は一度だけ動きを緩め、追いつくように腰が浮くのを待ってから、先ほどより速い間隔へ戻した。

「……っ、あ……もう……」

呼吸が短くなり、目の焦点が少しずつ定まらなくなる。

絶頂が近いのだと、経験の乏しい私にも分かった。

終わらせてほしい。それでも、この高まりが終わることを恐れている。その二つが、環さんの目と、開いた唇と、逃げ場を失った全身に同時に現れていた。

先生の指の動きが、もう一段だけ速くなった。

環さんが息を詰める。

「あ……もう、先生、私……」

腰が大きく浮き、全身が一つの点へ集まろうと

した、その瞬間だった。

先生の手が離れた。

「……どうして」

環さんの声が震えた。

行き場を失った体が、椅子の上で何度も小さく跳ねる。呼吸だけが激しく続き、開かれた脚は閉じることすらできない。

先生は環さんに触れず、その姿を私に見せた。

「これが、欲望を与えられずに止められた体だ」

環さんの目に、苦しさと、それでも続きを待つ期待が同時に浮かんでいる。

胸が大きく上下する。腹部は引きつり、足先ま

で細かな震えが走っていた。

先生の視線が、環さんから私へ移った。

そのとき、ようやく気づいた。スケッチ帳から離れた私の手。浅くなった呼吸。固く閉じたままの膝。環さんを見ているつもりだった私自身も、ずっと先生に観察されていた。

「そこからでは、表情の奥が見えない」

先生が私を振り返った。

「小暮。こちらへ来なさい」

第 3 話

欲望の行方

立ち上がろうとした私の膝は、すぐには言うことをきかなかった。

「小暮」

もう一度呼ばれ、両腿に力を入れる。膝に載せていたスケッチ帳が滑りかけ、慌てて椅子の上へ置いた。鉛筆は、途中で折れた線を最後に止まったままだった。

先生が環さんの左側に置かれた椅子を示した。

「そこへ座れ」

歩いていくほど、環さんの荒い呼吸が近づいて

きた。

腕一本ほどの距離まで来ると、さっきまで見えていたものが、別の密度を持って迫ってきた。赤みを帯びた頬。濡れた睫毛。息を吸うたびに張り、吐くたびに崩れる腹部。肘掛けの革帯に預けられた指は、何かを掴もうとするように曲がっている。

環さんが私を見た。

羞恥を隠そうとする目ではなかった。見られていることを承知し、それでもここにいると、自分で選び続けている人の目だった。

「顔だけを見るな」

先生が言った。

「一つの反応が、どこから始まり、どこへ逃げるか
を見ろ」

「はい」

先生の手が、環さんの体へ戻った。

触れられるより先に、環さんの肩がわずかに上がる。次に起きることを体が覚えている。指先の動きを迎えにいくように腰が浮き、閉じられない腿へ力が走った。

「……あ……」

先生は急がなかった。

いったん途切れた高まりを拾い直すように、ゆっくりと触れていく。環さんの呼吸が整いかける

たび、その奥に残っていた熱を呼び戻す。やがて
声が細くなり、腹部の震えが一つの場所へ集まり
始めた。

今度こそ届く。

そう思った瞬間、先生の手が止まった。

「……っ」

環さんの唇が開いたまま、声だけが出なかった。

背中が反り、肩が内側へ入り、指先が強く曲がる。
それでも脚は開かれたままで、行き場をなく
した力が全身の輪郭を細かく震わせていた。

「今の形を忘れるな」

先生はそれだけ言った。

先生の手が止まるまでは、まだ彫刻家として見ていられた。

環さんの首筋に浮かぶ緊張。呼吸に合わせて上下する胸。腹部から腿へ逃げていく力。それらを一つの形として記憶しようとしていた。

けれど、絶頂の寸前で置き去りにされた環さんが、開かれた脚のまま先生の手を追うのを見た瞬間、その視線を保てなくなった。

息が浅くなる。腿の内側が落ち着かない。腿をわずかに動かしただけで、ぐっしょりと濡れた下着が肌にまとわりついた。先生に触れられてもいないのに、自分の体がここまで欲しがっている。その事実から、もう目をそらすことはできなかった。

環さんの震えを見つめるほど、私の呼吸まで浅く、速くなっていった。先生の手が環さんの体へ戻るのを待っていたのは、環さんだけではない。触れられてもいない私の体まで、次の動きを待ち受けるように強張っていた。

もう、目の前の反応を、自分とは無関係な「形」として切り離して見ることはできなかった。

彫刻家として見届けようとする意志は、まだ残っていた。

けれど、一人の女として先生の手を求める欲望は、すでにそれを越えていた。

私はもう、環さんの体を形として観察しているだけではなかった。あの椅子に座り、先生の手に

触れられる自分を、環さんの姿へ重ね始めていた。

先生が再び触れる。

環さんの体は、さっきより早く反応した。待たされた記憶そのものが、次の高まりを押し上げている。呼吸が短くなり、目元から力が抜けていく。それと反対に、腹部と腿には強い緊張が集まった。

「先生……っ、あ……」

あとわずかというところで、また動きが消えた。

環さんの腰が先生の手を追い、組紐に戻される。喉の奥でかすかな声が震えた。

先生は何も言わない。

環さんが息を整えようとする時間まで、じっと

見ていた。どこに力が残り、どこから抜けていくのかを、指ではなく目で確かめている。

その視線に、胸の奥が痛んだ。

環さんは、先生にこんなふうに見てもらえる。

弟子としてだけではない。一人の女の欲望も、隠せなくなった顔も、そのすべてを先生は見落とさない。

私は彫刻を見る目を学びに来たはずだった。それなのに、環さんへ向けられる先生の目が欲しいと思った。

「先生……まだ……」

環さんの唇が震えた。息を継ぐことさえ難しい

ようだった。それでも、縋るように先生を見上げる。

「お願い……します。もう一度……」

先生はすぐには触れなかった。ただ、環さんの目をまっすぐに見返した。

環さんは逃げずに、小さくうなずいた。

その意思を確かめてから、先生の手が戻った。

四度目は、それまでより長かった。

先生の指は、再び環さんのクリトリスへ触れた。初めは先端を確かめるようにゆっくりと撫で、反応が返ると、そこから指を離さないまま小さな円を描き始める。

環さんの息が短くなり、腰が指を追い始めるにつれて、その動きは少しずつ速くなった。刺激される場所は変わらない。変わるのは指の速さと圧、そして止める瞬間だけだった。

環さんの声は、もう抑えられていなかった。

「あ……っ、先生……もう……」

肩が震え、背が反る。目の焦点が揺らぎ、全身が一つの瞬間へ集まりかける。

先生の手が離れた。

環さんは声も出せず、ただ何度も浅い息を繰り返した。開かれた脚を閉じようとする力さえ、すぐには戻らない。

先生はその姿をしばらく見つめたが、もう触れようとはしなかった。

環さんの呼吸だけが、静かなアトリエに響いている。

「先生……」

環さんが先生を見上げた。

「先生……お願いします。もう……いかせてください」

環さんは浅い息を繰り返しながら、縋るように先生を見上げた。

先生はしばらくその目を見つめていた。

「私がするのは、お前の欲望を引き出すところま

でだ」

先生は左手首、右手首の順に革帯を外した。

解放された環さんの両手が、肘掛けの上へ落ちる。先生はその指が動くことと、手首に異常がないことを確かめた。

「ここでやめるなら、残りの拘束も解く。まだ終われないなら——その手を使え」

環さんは自由になった両手を見た。

やがて右手を胸元へ置き、乱れた呼吸を一度だけ整える。それから私を見た。

「見ていて」

声には羞恥が滲んでいた。それでも、目はそら

さなかった。

私は小さくうなずいた。

「はい」

環さんの右手が、ゆっくり腹部を下りていった。

先生が寸前で止め続けた場所へ、自分の指を重ねる。

その指を見た瞬間、私の右手まで動きそうになった。

今すぐ作業用ズボンの内側へ手を入れ、ぐっし
よりと濡れた下着をずらして、自分のクリトリスを
擦りたい。環さんと同じように、何も考えられなく
なるまで自分を弄りたかった。

私は両手を強く握りしめた。そうしていなければ、
本当に手を伸ばしてしまいそうだった。

「……あっ」

環さんの肩が跳ねた。

自由になった左手が椅子の端を掴む。右手の動きは初めこそためらっていたが、体はすでに何を求めているのかを知っていた。呼吸が急速に短くなり、腹部と開かれた腿に、また強い緊張が集まっていく。

十を数えるより早かった。

「先生……っ、いく……いく、いくっ……！」

環さんの背が、弓なりに大きく反った。

喉の奥で途切れかけた声が、次の瞬間、堰を切ったように迸る。全身が一度きつく張りつめ、そのまま椅子の組紐まで震わせるほど大きく跳ねた。

そこからは、ひとつの波ではなかった。

肩から胸へ、腹から開かれた腿へ、幾重ものうねりが次々と押し寄せる。収まりかけるたびに、さらに深いところから新たな震えが突き上げ、環さんの体を何度も反らせた。椅子の端を掴んだ左手には、指先が白くなるほど力がこもっている。唇からは言葉にならない声が、波に引き出されるように途切れ途切れにこぼれ続けた。

寸前で奪われ続けた快樂が、今、一度に解き放たれている。

環さんはもう自分の体を支えることも、形を保つこともできず、全身を呑み込む大きなうねりの中で、ただ激しく震え続けていた。

私も、早くいきたい。

その願いが、濡れきった体の奥で、痛いほど強く脈打った。

先生は、手を出さなかった。

環さんの体が椅子の上で何度も揺れるあいだ、ただその変化を見ている。

ようやく息が戻り始めたとき、私は終わったのだと思った。

けれど環さんの右手は、濡れた場所から離れな

かった。

一度目の絶頂の余韻に震えながら、クリトリスに置いていた指をゆっくりと下へ滑らせる。中指の先で濡れた入口を確かめると、ほんの一瞬だけためらい、そのまま自分の内側へ深く沈めていった。

先生が今日、一度も指を入れなかった場所だった。

「……っ、ああ……」

環さんの腰が大きく浮いた。

初めて内側を満たした刺激に、眉がきつく寄り、開いた唇から低く艶めいた声がこぼれる。環さんは中指を深く入れたまま、自分の奥を探るように動かし始めた。

目を閉じかけ、すぐに開く。

私に見られていることを知りながら、それでも指を止めようとはしなかった。むしろ、その羞恥さえ快樂へ変えるように、環さんの腰がゆっくりとうねり始める。

指を入れてから、十数秒も経たないうちに、環さんは大きく息を呑んだ。

「また……くる……っ、ああ……！」

その声が途切れるのとほとんど同時に、二度目の絶頂が体の奥からせり上がった。

一度目のように、張りつめていたものが一気に弾ける絶頂ではなかった。

環さんの内側で生まれた波が、腰から腹へ、胸から肩へと何度も這い上がっていく。指を受け入れたまま腰が大きく持ち上がり、胸から腹へ続く線が、波に揉まれるように艶めかしくうねった。開かれた脚が組紐を震わせ、喉からは長く掠れた声がこぼれ続ける。

環さん自身が選び、自分の指で奥へ進み、その快楽から目をそらさずに迎えた絶頂だった。

右手を自分の中へ残したまま、環さんは何度も腰を震わせ、大きく深い波が通り過ぎるまで、そのすべてを受け入れていた。

先生は、最後まで手を出さなかった。

環さんの震えが収まっていくあいだ、アトリエに

は彼女の乱れた呼吸だけが響いていた。

私は、環さんの内側に残された右手と、その傍らに立つ先生の動かない手を見比べた。

先生が欲望を引き出し、限界まで追い詰めた。けれど、最後の一線を越えたのは、自由になった環さん自身の手だった。

その違いは、誰かに説明されるまでもなかった。

二度目の絶頂が生んだ激しく艶めかしい形として、私の目に焼きついていった。

環さんは何度か浅い呼吸を繰り返したあと、自分の内側に残していた中指をゆっくりと抜いた。

そのわずかな刺激だけで、腰がもう一度びくり

と震える。

濡れた右手は、そのまま力を失ったように下腹部の上へ落ちた。

先生は環さんの顔を、しばらく黙って見ていた。

乱れていた呼吸が少しずつ戻り、環さんの目の焦点が先生に合う。環さんは言葉を発する代わりに、小さくうなずいた。

先生も何も言わなかった。

そのうなずきを受けて椅子の背後へ回り、結び目を一気に解かず、張りつめていた組紐を少しずつ緩めていく。両膝が自由になってから、左右の足首の革帯を順に外した。

支えを失った環さんの膝が、ゆっくり内側へ戻っていく。自分の意思で脚を閉じるという、それだけの動作が、拘束される前とはまるで違う意味を持って見えた。

環さんはしばらく椅子に座ったまま呼吸を整えた。それから自分で立ち上がり、作業台に置いていた下着とワンピースを一枚ずつ身につけた。

先生は最初から、墨色の仕事着を一度も脱いでいない。上衣も、同じ布の作業用ズボンも、着たままだった。

それでも、もう同じようには見られなかった。

着替えを終えた環さんが、私の前で足を止めた。

頬にはまだ赤みが残っていた。視線が重なった

のはほんの一瞬で、環さんは耐えきれないように目を伏せる。

何かを言おうとしたのか、唇がわずかに動いた。けれど、声にはならなかった。

私も何も言えなかった。礼を言うことも、慰めることも、今はどちらも違う気がした。

短い沈黙のあと、環さんはもう一度だけ私を見た。

その目には羞恥も疲労も残っていた。それでも、後悔だけはなかった。

環さんは小さくうなずき、そのまま私の横を通り過ぎると、奥の扉から退室した。

扉が閉まった。

先生と二人きりになった途端、それまで環さんへ向けていた視線の置き場を失った。

椅子の上には、革帯と解かれた組紐が残っている。私のスケッチ帳には、一本の途切れた線しかない。

それなのに、体の中には、見たものが余すところなく残っていた。先生に触れられたのは環さんだけだった。それなのに、私の下着はとうにぐっしょりと濡れ、肌に張りついていた。

下着を越えて、チャコールグレーの作業用ズボンにまで染み出しているかもしれない。確かめようにも、先生の前でそこへ視線を落とすことなど

できなかった。

もし、もう見られていたら。

そう考えた途端、恥ずかしさで両腿に力が入った。けれど、今さら隠せるはずがない。先生なら布の染みを確かめるまでもなく、私の体がどうなっているか、とっくに見抜いている。

環さんが退室しても、今すぐ自分を弄り、いきたいという衝動は少しも弱まらなかった。家に着くまで我慢できるのか、それさえ分からない。

けれど、私が欲しいのは、自分の指で得る絶頂だけではなかった。

環さんと同じ椅子に座り、先生の手で限界まで追い詰められ、先生の目に何もかも見抜かれてみ

たい。

私は、先生の手で限界まで追い詰められたい。

その先でどうなるのかは、今はどうでもよかった。ただ、見ているだけでは届かなかった場所まで、自分の体で行ってみたい。

もう、言い逃れのできない願いだった。

体験版はここまでです

「七日後まで、

自分で慰めることを禁じる」

熱を抱えたまま、七日間耐えた真帆。

次に全裸であの椅子へ拘束されるのは、

彼女自身だった。

目隠しの暗闇で始まる、師匠による異常な指導。

やがて師弟の一線は、

男と女の境界へ――。

「今度は、止めない」

続きは製品版で。